

松山藩士の子に生まれ 生涯を師範教育に捧げた偉人

山路一遊

元松山市立素鷲小学校長
伊予史談会会員
上岡 治郎



山路一遊校長

一、正門跡に建つ記念碑

西堀端の「札の辻」にほど近い若草町の愛媛県合同庁舎の道路沿いに「愛媛教育創之地」の碑が建っています。

ここは、かつて「白亜の殿堂」とも「伊予の阿房宮」（秦の始皇帝の築いた宮殿）とも呼ばれた愛媛県師範学校本館に通じる正門のあった所で、ま正面に見える本館の雄姿と、「行く方も知らず流れ去る……」と歌われた校歌が共に刻まれています。

なお、この記念碑は、男子師範同窓生の募金によって昭和47年12月に建立されたもので、教育者を目指す愛媛の若者たちの青春時代の夢の跡を示す碑でもあるのです。

二、空襲で全焼した母校

われらの母校のシンボル白亜の塔が昭和20年7月26日、米機空襲のとき私は附属小学校の教官で、しかも



卒業生の心のふるさと 師範学校跡の「愛媛教育創之地」の碑



「伊予の阿房宮」と称され、愛媛の教育を支えた在りし日の愛媛県師範学校の偉容

宿直であったのです。焼夷弾の第一弾は、古町駅、師範本校の炊事場、附属小学校、勝山幼稚園に落ちました。本校も

附属も消しとめたのですが、第二弾からはまったく火の雨で、間断なく攻めたてられ、ついに全市火の海と化し、私どもも運動場の壕で夜を明かしました。米機の行ったあと、全市炎上のただ中に立って、私は母校の焼け落ちるのをまざまざと見たのです。あの美しいゴシック式の木骨が歴史の終りを示すかのようにえんえんと燃えつづけ、周囲の建物がくずれても毅然として最後まで立ちつづけ、やがて吹き上げる火の粉とともに燃え落ちたとき、小さな防空壕のそばで顔も皮膚も干（ひ）からびそうなものも忘れて立って見守っていた四人のほほは涙にぬれていたであります。（渡部 徹先生 文）

三、山路一遊先生のこと

私が空襲で焼失した愛媛県師範学校本館の「白亜の塔」にこだわっているのは、私の母校であるということもあるが、昭和12・12・18発行の師範学校同窓会報に載る次の文章にひかれるからである。

「山路先生、私が初めて先生のお姿を拝したのは、愛媛の師範が香川・愛媛と分立する事になり、先生が初代の香川県師範学校長となられ、香川出身の生徒を受取りにこの師範学校へお出でになった時、あの本館の露台にお立ちになったお姿でありました。当時生徒であった私共は、その颯爽たるお姿に打たれたものでありました。」

これは当時、教育出版界の重鎮であられた曾根松太郎先生（明治25卒）が、後記する「山路一遊先生の頌徳碑除幕式」で述べられた祝辞の一節である。

（香川県は明治9・8・21愛媛県に合併し、12年後の明治21・12・3に分離独立している。）

このように建築物一つにもドラマがあり、また歴史がある。ところで明治草創期に全県の小学校設置や松山中学、師範学校設置に努力した内藤素行（鳴雪）学務課長は山路先生と深いつながりを持つ人物で、後年、文部省でも一緒になる。なお山路先生は香川県に赴任する時、内藤先生の長女順と結婚式を挙げて赴任している。

四、山路一遊先生の生い立ち

安政5・10・17
藩主の御側役山路一審、綾の長男として、松山市南堀端一番地に生まれる。（1歳）
藩校明教館に入り漢学修業（7歳）

明治3・8
松山藩立洋典科に選抜にて入学し、英語・洋算を原書で学ぶ。（13歳）

同 5・9
石鉄県立算数科に入り、代数・幾何・和算を学ぶ。（15歳）
学制頒布。勝山学校開設せられその教師となる。（15歳）

同 7
大阪に出て小学校教師となるも望郷の念禁じ得ず12月に帰郷。

同 8・3
父に懇願して再び上阪、大阪英語学校（第三高等学校の前身）に入学勉学に励む（18歳）
父より家計窮迫、学資送れず、直ちに帰郷せよとの命あり。（19歳）

同 9・5
県立北予変則中学校（松山中学の前身）五等助教となる。月俸六円。（数学教授の傍ら同校々長草間時福の英学の講義に出席）（20歳）

同 10・8・28
依願解任。父の許しを得て五十円を懐に笈を負うて上京。東京師範学校（東京高等師範学校の前身）中学師範学科に入学。

同 12・8・5
家督を相続する。（26歳）
同校を首席で卒業。（27歳）

同 12・9
文部省御用掛、月俸35円。文部省と兼任、6カ月間、高知県師範学校長。（29歳）

同 16・12・24
高知より東京へ赴任の途、七年ぶりに松山に帰省、錦を衣て故郷に帰るの感をなす。

同 17・4・5
香川県第二部学務課長。

同 17・4・9
内藤素行（鳴雪）の長女順と結婚。東京神田明神にて挙式開花楼にて披露宴。（32歳）

同 19・11・23
香川県尋常師範学校長。（以下略）

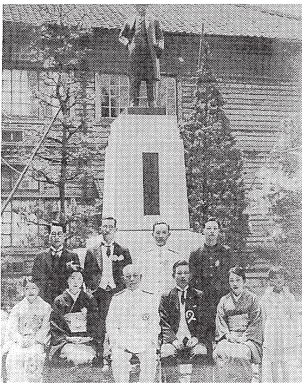
同 22・2・23
同 22・2・4

同 22・10・2

同 22・10・2

生涯を師範教育に捧げた偉人

Ichiyû Yamaji



滋賀県師範学校に建立せられた山路一遊先生の銅像と遺族

五、滋賀県師範学校校長時代

山路先生はそれ以後、兵庫・愛知の師範学校校長、埼玉・福島の視学官などを歴任し、明治35年12月、45歳で滋賀県師範学校校長となる。

滋賀県師範学校校長時代は、先生の人格の最も円熟せる時代で、事理明快、豪気果敢、よく職員を掌握し、慈父の如く生徒を愛し、滋賀県師範学校をして天下の師範学校たらしめたのである。

そのため、先生が郷里愛媛に去られるや、滋賀師範の卒業生たちは、雛鳥が親鳥を慕うように、機会を作っては松山を訪ね、先生にお会いするのを無上の喜びとしていたのである。これは、滋賀師範の同窓生たちが昭和16年1月に刊行した「恩師・山路一遊先生」にくわしい。

また、先生没後の昭和9年6月、滋賀県師範学校創立六十周年の記念日をとし、先生の遺徳を顕彰して、師範学校校庭に「先生の銅像」を建立せし事とあわせ考え、先生がいかに滋賀県で名声を博していたかということがわかるのである。

六、愛媛県師範学校校長となる

先生が愛媛県師範学校校長として、郷里に転任して来られたのは大正2年、先生56歳の時であり、その理由の第一は、郷土の後進を育成したいということ。第二は、郷里にある母への孝養と祖先の霊を祀りたいということであった。

だから、先生は、安楽を求めて郷里に帰られたのではない。大正12年ご退職になられるまでの10年間で、全身全霊をこめて、愛媛県教育に尽瘁されたのである。

まず、新任当日、先生は全校生徒の前で、

「学校は教員のためのものではない。学校は、生徒のためのものである。だから、学校をよくするのも悪くするのも、すべて生徒の力による。生徒諸君はこのことをよく考え、卑屈な根性を捨て、真に発らつたる人間になつてほしい。」と、獅子吼されたのである。

このことは当然のことながら、生徒たちに主体性と自覚心を呼び起こし、式終わつたあとの食堂の黒板に、「吾人は、頼むべき校長を得たり、万歳！」という落書となつてあらわれ、山路一遊先生は新任の第一歩にして、全校生徒から絶対の信頼を得たのである。

こうして、山路先生は生徒はもとより教師すべての信頼を得て、愛媛県師範学校をもつて愛媛県内教育の本山と任じ、校内はもとより、県下の教育研究に力を注ぎ、もつて愛媛教育百年の土台づくりをされたのである。(先生のご退職は、大正12年3月30日である)

七、師道鑽仰之碑

山路一遊先生が逝去されたのは、昭和7年8月19日であり、享年75歳であったが、先生死すとの報伝わるや、卒業生たちは慟哭した。そして直ちに「山路会」を結成し、先生の顕彰のために奔走した。そして、左に示す「師道鑽仰之碑」が、思い出の愛媛県師範学校本館前に建立されたのである。(現在この碑は、藤谷庸夫先生の尽力で愛大教育学部中庭に移転)



山路一遊先生頌徳碑 師道鑽仰之碑

撰文 林伝次・書 織田源九郎

「人ノ師タル者ハ須ク嚴毅ニシテ寛仁達識ニシテ清高ナルヘシ 毫モ鄙吝陋劣ノ心志アルヘカラス 然シテ子弟ヲ教フルニ性ニ随ヒ材ニ応シテ各其ノ徳器ヲ成就セシメンコトヲ要ス 是先師山路一遊先生力躬ヲ以テ垂訓シ給ヘルトコロ 我等先師ヲ鑽仰スル者宜シク斯道ヲ継紹シテ教学ノ興隆ニ努メサルヘカラス 茲ニ勅シテ以テ人ノ師タル者ノ戒メトナス」

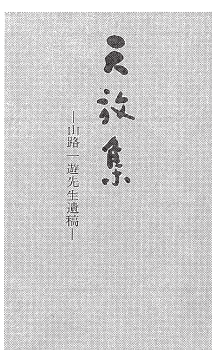
天下の名文と言われるこの碑文は山路一遊先生を生涯の師と敬慕する林伝次先生の撰文、碑の企画立案は藤谷庸夫先生である。なお竣工除幕式は(参列者八〇〇名)である。

八、美しい師弟愛



常信寺(祝谷)にあった山路一遊先生御墓所には数多くの教え子(右毎月のように墓参をする) (右端筆者)

山路先生ご退職後も、先生を慕う者たちが先生の家に集まり、先生のご口述をもとに伝記を作る計画をたてたが、先生のご逝去により、それは果たされなくなった。



山路一遊先生遺稿天放集

「今この御口述を浄書している私の耳には、先生のそのお声がはっきり聞こえ、眼の前には筆記しつつ時々見上げたお顔がはっきり見えます。幾度か涙を拭いしつつ浄書を終えました。『武内生』」

しかし、この武内好将先生(大5・3卒)は、山路先生の最後のご口述を筆記した日から44年後の昭和51年10月、『天放集』山路一遊先生遺稿集(六二七頁)を81歳で出版され、美しい師弟愛の伝統を今に伝えている。